豆つぶ先生、がんばる。

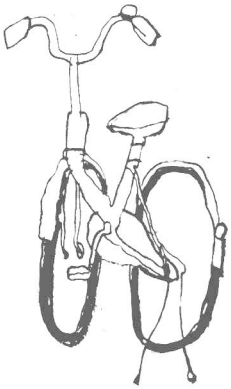
瓜生桂子

葦書房

瓜生桂子

豆つぶ先生、がんばる。

葦書房



豆つぶ先生、がんばる。

一九八四年七月二〇日第一刷印刷
一九八四年七月三〇日第一刷発行

定価 一五〇〇円

著者 瓜生桂子
発行人 久本三多
発行所 葦書房有限会社
福岡市中央区赤坂一丁目一四番二一号
電話 〇九二(七六一)二八九五
振替 福岡一-三九四三〇
印刷所 正光印刷株式会社
製本所 白岩製本所

落丁・乱丁本おとりかえいたします
0095-8432-0135

はじめに

私は生まれてこのかた、ずうっと女。

教師になって、ずいぶん長い。

ここらでちょっとひと休み、と振り返ってみる。そんな私に、これは確かだと言えるものが、もし今、手のひらにあるとするなら、それは歩んできた私自身の道のりだけ。

齢のせいなのか、時代のせいなのかわからないが、心の内側から感傷とは違った何かがしきりに戸を開けてくれるよう叩きつづけている。

毎日、学校の仕事を終わって、家に帰る。

あらかた家事をすまし、テレビのスイッチを入れる。

画面に登場する人たち——。演技がなかなかうまい。タレントを生かし、劇中人物になりきっている。

それにひきかえ、私は身長わずか百四十五センチ、文字通り豆つぶ教師。小さいので、いつでも、誰からでも、上から見降ろされる。私はそんな人生を五十年以上、歩きつづけてきた。美形とも縁遠い。が、さいわい身体だけは丈夫。

その私が、茶の間のタレントたちに負けないよう演じつづけている私の毎日がある。まだまだ、終わりの幕は降りそうにない。

観客は、もちろん、はじめっからいない。

博多の町をふるさとに持つ女。そんな女の平凡な人生の足跡もあっていい。

子供たちも成長した。ふっと、息を吐いて、うしろを振り返る。

夢中で歩いた道だった。

今、誰にともなく語りたいこと、聴いてもらいたいことが山ほど。

今日を生きている私。その心の押し入れを開いて、古い荷物、大切なもの、ガラクタ、それに隙間を埋める綿ぼこりなど、忙しいあいまに、何とか整理を始めてみたい。

子供のころのこと。

戦争があったこと。

三日もしたら止められないと言われる教師の仕事。

妻、母であること。

めまぐるしく変わる世の中の暮らしのあれこれ。

そう、その荷物の間に、色褪せた毛糸の玉がころがっている。これで流れる時代を縦糸に、私のまなざしを横糸にして、何か編んでみよう。きっと確かなものが出来上がりそうだ。

ペンと手がうまく運んで、形のあるものが出来上がるといい。だが正直なところ、私の生活雑

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

感や平凡な出来事などのこまごました素材ばかり……。

それでもいい。モチーフ編みをつなぎ合わせたセーターが出来上がるかもしれない。

手づくりのまとまったものに仕上げられたら、と願っている。

目

次

はじめに……i

第一章　この場所から

懐かしい町並み……五
貧乏、金持ち、大金持ち……八
お店、繁昌……九
八角形の古時計……一三
蔵……一四
軍靴の音が……一七

第二章　軍歌を聴いて

死と向きあう……二三
振り袖……二六
「あまり」の気持ち……二九
疎開……三〇
福岡が焼かれた……三三

第三章　焼け跡

八月十五日……三七
空白の時間……三九
山ももの実……四一
父のうそ……四三
空腹……四七
二発の銃声……四九
まだまだペコペコ……五三
ハロー、英語さん……五五

第四章　そこから歩く

壁……六一
なぜ、教師に……六五
そこから歩く……六六
俸給……六九
はじき豆……七三

入道雲……六六
二人三脚……七九
すすめられた座ぶとん……八二
夜道……八四
生命を産む……八五
ブランコちゃん……九〇
引っ越し、よろしく……九二
折れた自転車……九四
水害……九七
怪物くん……一〇〇
母親党……一〇三

第五章　大学ノート

座……一〇九
私の愛した学校……一一〇
マイ・カー走り出す……一一三
ものには生い立ちが……一一六

どんな罪……一三
教育雑感……一三六
横に並ぶ　くせ　制服のうち、
そと　何でも悪者にしないで
そう言えば　A君が先生　カンニング事件　「ルパン三世」やろうや！

第六章　あんたの学校、ボロ学校

大きな樹、見えない木……一三三
おんなの樹……一三七
母の珊瑚……一六三
祖父母のころ……一六九
見えない木……一七三
寂しい木……一七四
父の名前の不思議……一七五
そして、ふるさと……一七七
つくられた地図……一七八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

わ、な、にかかる心……一八〇

第七章　今いるところ

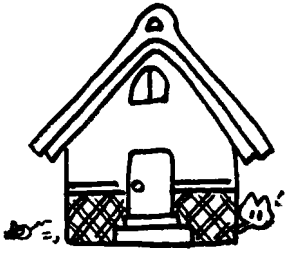
変わらない暮らしのかたち……一八九
だんじょどうけん……一九〇
ふたたび、ふるさとで……一九三
いつか来た道……一九八
私の座ぶとん……二〇一
今も教師……二〇三

おわりに……二〇七

本文カット　瓜生直子

豆つぶ先生、がんばる。

第一章　この場所から



懐かしい町並み

もと、博多の町がまだ旧博多駅界隈の人の出入りでにぎわっているころ、そのまま真直ぐ足を伸ばして海に突き当るところ、そこから私の記憶は始まる。

一九三一年（昭和六年）十一月、私は博多の大浜、質屋の娘として生まれた。

当時、人びとはその日を〝明治節〟と呼んでいる。私が生まれた日もすばらしい天気の国家の祝日。日本中の家々の戸口に日の丸の旗が掲げられ、菊のかおりがいっぱい漂っていたそうだ。

遠い日のめじるしがまず浮かぶ。

お向かいの家の前に、桃色の飾りをつけた夾竹桃が一本にょっきり。往還いっぱいの土ぼこり。カラン、コロン、カラン、コロン、下駄の音。パタ、パタ、パタ、パタ、草履の音だ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.